

微鏡も使って) 観察することを奨めた。

IV 全体の感想等

講座の冒頭、受講生たち(小学生高学年)にこう問いかけた。「君たち、家できのこ料理が出たらちゃんと食べる?」

喜んで食べる子どもは一人しかいなかった。大人になるにつれて嗜好が変わってくるのだろうが子どもたちのきのこへの無関心は幼・保・小学校・家庭での、毒きのこの先入観にとらわれ過ぎた「きのこに触れさせない・近寄らせない」注意やしつけが遠因にあると思われる。また、きのこは森や林の産物であり日頃の自分たちの生活範囲である都市圏からは遠い、との思いこみもある。しかし、土地の攪乱が激しい江戸川区といえども気をつけて採せばきのこはあちこちに発生しており、生態系の中での意外ではあるが重要なはたらきを知ることができる。

きのこは仲よくしておいて損はない存在

である。「きのこのことを正しく知って、もっともったきのこを友だちになろう」とさらに呼びかけていきたい。



図5 講座のようす

いろいろな持ち味と可能性を発揮してくれた子どもたちと楽しく研究できる機会を与えていただいた、江戸川区子ども未来館の高木嘉雄館長(当時)、講座を支えていただいた城田三雄指導員、片柳文男指導員はじめ未来館スタッフの方々に深く感謝いたします。□

開催報告「マトからみたきのこたち -マトリョーシカに描かれたきのこから広がる世界-」

去る 2015 年 2 月 10 日(火)~15 日(日)、内外の木製雑貨を取り扱い、日本屈指のマトリョーシカ専門店でもある『GINZA HAKKO 木の香』に於いて、会員有志による表題の展示を行いました。北川公子きのこグッズコレクションから、きのこの描かれたロシアのマトリョーシカと、高度成長期の日本で売られたこけしの中からきのこのみを選んで展示、歴史資料をまじえてパネルで簡単に解説、ロシアに今なお息づく森林文化と、かつて日本で賑わいをみせた松茸狩りを、雑貨をとおして垣間見ました。展示の詳細については、小冊子が発行されています(69 頁参照)。

会場には、大作晃一さんの白バック写真、本誌の表紙を描く片山周子さんの原画やマトリョーシカ、kinoko-mono を手がける浅井土筆さんによる精密なきのこ彫金雑貨やウッドバーニング技法を用いた新作もならびました。お店には開催にあわせてロシアやドイツのきのこ雑貨が満載で、きのこフェアさながら。14 日には講演会「きのこの暮らし」があり、きのこという生き物がどんなふうにも暮らしているか、また、きのこ狩りの極意は山の植生をよむことである、という興味深い講演が、吹春俊光・大作両氏からありました。来年も同時期に開催予定です。(公)

